

13. 葬儀

江田 香菜子

1. はじめに
2. 以前の葬儀
3. 現在の葬儀
4. 考察
5. おわりに

1. はじめに

核家族化や生活様式の変化に伴い、伝統的なしきたりを継承してきた通過儀礼にさまざまな変化が生じてきている。葬送儀礼（葬儀）もその中のひとつだ。かつては自宅で行われるのが一般的だった葬儀が、今では葬儀社のセレモニーホールで行うことが当たり前になった。「葬祭ビジネス」という言葉の存在が象徴するように、葬儀業界が出現し、さらには規模が拡大しつつある。

故人が生前に信仰していた宗教・宗派によって多少の違いはあるものの、葬儀の流れには基本的なテンプレートがみられる。しかし近年は葬儀社側が故人や遺族のニーズに応じて多様なサービスを提供している。例えば、身内だけで行う「家族葬」、海や山に散骨する「自然葬」など、さまざまな葬儀のかたちが存在するようになった。このように葬儀が変化してきたのは上町地区も例外ではない。本章では、上町地区で以前より行われてきた葬儀、また、現在行われている葬儀について述べていきたい。なお、本章を通して用いる「以前」という言葉の定義であるが、葬儀社の式場で葬儀を行うことが主流になるまでであり、1960年代頃までを指すものとする。

2. 以前の葬儀

本節では、『石川県鳳至郡誌』・『柳田村史』と本調査で伺った過去の葬儀の様子に関するお話から、上町地区でみられた、以前の葬儀がどのように行われていたかについて述べる。

以前は、葬儀は僧侶によって自宅で行われるのが一般的であった。遺体を湯灌したのち数珠をかけ、剃髪し、棺桶に入れる。七条袈裟で覆った棺桶を桶台に乗せる。この際、上流階級の人には日覆いを施す。供物は蓮華、牡丹、菊などをすべて紙で作った紙花、燈籠などがある。焼香は子孫兄弟から順次親戚に及ぶ。火葬場まで送る際は白衣を着用しわらじを履く。白骨は四十九日または次の盂蘭盆まで自宅の仏壇に安置し、読経供養する。同地区内の者は香典5銭以上、仏供米1升以上、料理の材料などを贈って、故人の家を訪ねる。親戚であるかどうかを問わず、葬儀に関わる雑役は皆で助け合って行う。

喪主は贈品者に一飯の饗応をする。遺族は四十九日まで精進し、その翌日、親戚は精進見舞いとして餅やまんじゅうなどを贈る慣習がある。しかし『石川県鳳至郡誌』発刊当時には、規則を設けてこうした慣習を省略する家もあった（『石川県鳳至郡誌』1923：1052-1053）。

昭和 50（1975）年に出版された『柳田村史』（1975：840-845）には、真言宗・禅宗と浄土真宗との作法の違いや、高度経済成長期の生活文化の変化に伴う一部作法の簡略化について着目しつつ、葬儀の流れについて項目ごとに詳しく記述されている。

葬儀の執行

近親者・近隣者が協力し、葬儀の諸準備・進行を行う。

香奠帳に記載されている部分を参考に、相応の互助をしている。

故人との親疎関係・社会的地位を考慮して所役を分担する。例えば、亭主役（主人代理）は本家の主人がつとめる。他にも寺役、饗応係、飯米係、野人足などの役がある。

香典・仏供米、塩草料を届けるしきたりがある。

ヨボシゴ（疑似親子関係のうちの子）を含む近親者は、香典と別途に、初七日に精進見舞（金品、米、菓子類）を届ける作法がある。

嫁の実家は葬儀当日に赤飯を炊いて届けるという習俗がある。

枕返し

サンバワラ（藁）を敷いた上に、ガイ（遺体）を西向き・北枕にして横たえる。

ガイの上に刃物・金物（小刀・古鎌など）をのせておく。これには、ガイに無縁の魂が侵入すること、魔物がつくことを防ぐ目的がある。

湯灌

死後 1 日おいてから湯灌を行う。

ソデジャク（杓子を逆さまにもつこと）で手桶の湯を竹製の杓子でくんでゆっくりかける。

湯灌に使った水は床板をまくって縁の下へ流す。

昭和 20（1945）年頃までの一般的傾向として、湯灌を行うのは故人から生前に依頼された者（ヨウガン・ミョウガン）か村内の下層階層者だったが、『柳田村史』出版時（1975 年）前後には実子、娘婿、ヨボシゴが湯灌を行うのが一般的となった。

棺桶

全般的に丸形でタガ入りのものを使用する。

昭和 43（1968）年 12 月の柳田共同火葬場完成をきっかけに、寝棺を使用するようになった。

真言宗・浄土宗などでは、棺中に握り飯（焼飯）を入れ、杖、白足袋、草靴、スゲ傘などを着せる。

死人に着せるカタビラは、魂が出やすいように結ばないでおく。

葬儀

内葬礼・野葬礼ともに家屋内で行う。

内葬礼では女性が焼香し、野葬礼では男性が焼香する。

故人と血縁の近い者から順に焼香する。

故人の養子であるヨボシゴは実子に次いで焼香する例が多い。

ノオクリ（ハダシマイリ）

昭和 20（1945）年頃まで、日覆いを使用するのは上層階層者に限られていた。しかし後に葬具がムラの共有物になり、例外なく日覆いを使用するようになった。

故人と血縁の近い者ほど桶台に近く、ゼンノツナ（オテヒキ）につながって、白無垢・白足袋装束で葬列に従う。

喪主をはじめ家族員、故人のヨボシゴなど 10 人以上が白無垢でノオクリ（野送り）をしていた。しかし第二次世界大戦以降は生活改善により、ノオクリは 3～4 人程度で行われるようになった。

桶台を担ぐ者はノワラジ、マドアキワラジを新調する風習がある。

葬儀に関する俗信

トモビキ・トラヨケの日のノオクリは避ける。

寺へ御仏供米（オブクマイ）を持って死亡を知らせに行く役を担う 2 人のうち、先に寺へ言葉をかけた者が先に死ぬ。

火葬・埋葬

火葬場はノー（野）、ムジョウドウなどと呼ばれる。

埋葬地は一般的にハカショ、ハカバハカワラ、ハカヤマなどと呼ばれる。

焼いた骨は箱におさめ、49 日間仏壇に安置したのち、墓に納骨するのが一般的だが、35 日間、51 日間（長く仏壇に置いておくほど手厚い供養ができると考えられていた）置いて納骨する例もあった。

浄土真宗では火葬が早くより一般的だった。

真言宗・曹洞宗では徐々に火葬に移行しつつも埋葬した事例もある。

服忌

真言宗では、出棺後、大戸口にカドフダ（紙札）をはる。

葬送後は死に伴う不浄の状態が存続すると意識され、遺族は服忌・精進（ショウジン）しなければならない。

服忌は四十九日までが一般的だが、幼児が亡くなった場合は 35 日間とすることもあった。

男性が亡くなったら 51 日間、女性が亡くなったら 50 日間でショウジンアケ（精進明け）を迎える。

ショウジンアケを迎えるまでは魚・肉を一切食べてはならないという伝承がある。

埋葬の場合は「お水を飲まず」と称した 7 日ごとの参詣をする。

服忌中は祭礼に参与せず、鳥居をくぐったり氏神の境内に近寄ったりしてはならない。

法要

初七日、四十九日に近親者を招いて法要を行う。

真言宗・曹洞宗では7日ごとに1本ずつ、計7本の板塔婆をハカショに建てる作法があった。しかし火葬になってからは四十九日に7本の線が入った塔婆を建て、百日目に板塔婆を建てるように変化した。

先祖の命日には孫の代まで仏壇に御仏供飯を供える。

盆の13日はショウライサマと呼ばれる。先祖代々の位牌を床の間にしつらえた祭壇に安置し、蓮か桐の葉にダダメ（野菜類を細片にきざんだもの）を供えて饗応する。

コンゴマイリ¹⁾（8月1日）では、新仏の初盆に米一升を余分に寺へ届ける。

盆の3日間は墓地にシカク（キリコ）をつけて供物をあげる。

年忌法要は一回忌、三回忌、七回忌、十三回忌、十七回忌、二十三回忌、三十三回忌、五十回忌、百回忌がある。百回忌は弔い上げとして丁重に行うが別の法要と同時に行う例もある。

三十三回忌に角塔婆を建てて弔い上げとする地域もある。

以上が『柳田村史』の葬儀に関する記述のまとめだが、一方で自宅での葬儀について聞き取り調査を進める中でよく聞かれたのが、葬儀を円滑に進行するためには同じ班や同じ地区の人同士で助け合わなければならないということだった。故人の家にはケガレがあり、その台所を使つてはいけないため、近隣の家台所を借りなければならないとか、遺族は台所に入つてはならないというしきたりがある。そのため、近隣に住む女性たちが遺族や弔問客用の食事を作ったようで、そこに自家製の漬物などを持ち寄ることもあった。近隣に住む男性たちは悲しみにくれる遺族の代わりに葬儀に必要な準備や進行を担った。葬儀の段取りを決めたり遺体を火葬したりする役があった。

以下に具体的な聞き取り内容を紹介する。

Aさん（神和住、男性、60歳代）

昔は家で葬儀を行うことが多く、遺体を拭く作業なども遺族が行っていた。50年程前は村で遺体を焼き、「おんぼう焼き」と呼ばれる役の者が一晩中焼いていた。

葬式が行われる家でふるまわれる食事では、同地区の人が家で作った漬物がふるまわれることがあった。

Bさん（合鹿、男性、60歳代）

葬儀は寺ごとに作法が異なっている。その例のひとつに焼香のタイミングがある。

家族葬が近年増加気味である。しかし多目的交流センターのホールは大きく、家族葬

¹⁾ 「コンゴマイリ」とは、実親を亡くした娘が生家の菩提寺を訪れて親を弔うこと。能登特有の風習で、簡単に里帰りできなかった頃は嫁いだ娘が里帰りする良い口実となっていた。漢字では「魂迎参り」・「魂供参り」・「金剛参り」・「魂合参り」などいくつか書き方があり、旧柳田村ではオヤノマイと呼ぶほうが一般的だった（西山 1986）。

にはあまり向いていないと言える。かつて柳田に家族葬向けの葬祭会館があったが既に廃業してしまった。

能登三郷斎場と多目的交流センターが作られる前、合鹿地区の葬儀は自宅葬が主だった。人が亡くなると神棚の下で遺体を拭く。遺体の両手を合わせて体育座りの態勢になるように棺桶に入れて、竹で巻いて締める。その棺桶を家族が担いで火葬場まで運んだ。棺桶を横向きにして置き、藁を被せて家族が火をつける。火葬を行うのは村の少年団の役割だった。他の地区では棺桶から遺体を出して遺体に直接火をつけて火葬をするところもあった。

四十九日の間、心臓内の心室が弁によって明確に分けられていない動物や四つ足の動物の肉、生魚を食べてはいけない。亡くなった当日と通夜の日の朝食・昼食は遺族が作ってはいけないため、近所の人が食事を用意していた。台所に入ることがよくないとされた。葬儀などの段取りは男衆がしていた。大体1軒から2人が手伝いに出ていた。

Cさん（寺分、男性、60歳代）

15年前（2001年頃）まで自宅葬をしている家があった。農村の柳田では家が広いことがある種の富の象徴（ステータス）であったため、自宅葬をするために必要なスペースを確保することができた。

昭和45（1970）年頃から平成8（1996）年に能登三郷斎場が完成するまで、現在の能登町である旧柳田村・旧能都町・旧内浦町はそれぞれ火葬場が異なっていた。昭和45（1970）年頃よりも前の時代では、集落ごとに棺を担いで山の上に運んで火葬していた。火葬する時はお坊さんも一緒に行っていた。

Dさん（上町、女性、80歳代）

50年くらい前は、遺体は丸い桶に入れて山で燃やしていた。

同じ班の人が葬儀を手伝った。1軒から男女1人ずつ手伝いに出た。3人くらいは留守番役として葬儀の間ずっと亡くなった人の家にいた。男の人は主人の代わりを務める人、火葬時に藁をかけ遺体が燃え終わるのを待つ人などがいた。後者は大体5人くらいがその役を務めた。火葬が終わったら遺族がお骨拾いをして、遺骨を持って帰る。

子寺が、葬儀を行っている故人の家にお参りに来る。

赤御膳を近所の女の人たちが作る。お重詰め、フキをはじめとする山菜の下準備など、周りに指示を出す女の人がいる。今は折り詰めが多い。通夜の時は近所の人煮物やおにぎりを作って自家製の漬物と食べるが、これは今でもやっている。

四十九日の法要は29日や35日で行われることがある。最近は親戚を呼ぶことがなくなってきた。

昔に比べたら近所とのつながりが薄くなってきた。

3. 現在の葬儀

本節では、本調査で伺った現在の葬儀の様子に関するお話から、現在上町地区で一般

的に行われている葬儀について述べる。

3.1 現状

現在、上町地区で亡くなられた方のほとんどは能登町多目的交流センターでの通夜・葬儀を行った後に、隣接する能登三郷斎場で火葬される。セレモニーホールでの葬儀がそれまで行われてきた自宅葬にとってかわった背景のひとつには、近隣住民の負担が大きくなったことが挙げられるようだ。といっても、手伝わなければならない事柄や役割が増えたのではなく、高度経済成長期前後に専業農家を辞めて会社勤めをする人が増えたことで一日の時間の使い方が大きく変化し、近所へ葬儀の手伝いをしに行くことが大変になったのである。そしてその結果として、葬儀をコンパクトに行いたいというニーズが徐々に増加した。この施設はホールと火葬場が併設されているため、利便性が高いという意見が多く聞かれた。そこで、この施設に関して記述しておく。

3.2 能登三郷斎場・能登町多目的交流センター²⁾

平成 3 (1991) 年 12 月、旧能都町が「斎場建設基本構想」を策定した。平成 4 (1992) 年 10 月には旧能都町藤ノ瀬地区住民から同意を得て斎場の建設を決定した。藤ノ瀬地区は旧能都町と旧柳田村の境目に位置している。亡くなった人を燃やす煙が向かった先で次に亡くなる人が出るとして斎場は忌まれることが多く、集落から見えにくい場所に建設するよう配慮された結果として同地区が選定された。平成 8 (1996) 年 12 月に斎場と (第 1) 多目的交流センター (以下、第 1 ホール) が竣工・供用開始となった。平成 17 (2005) 年 3 月、旧能都町、旧内浦町、旧柳田村の 2 町 1 村が合併して能登町が誕生したことに伴い、斎場と多目的交流センターは能登町の公共施設となった。平成 18 (2006) 年には第 2 多目的交流センター (以下、第 2 ホール) が供用開始となった。当初はホールと斎場の両方を利用する人と斎場のみ利用する人の 2 パターンがあった。しかし町域が広く、なおかつセレモニーホールが少ないため、相対的にホールの需要が高まり、第 1 ホールだけでは対応が難しくなったことで第 2 ホールの増設に踏み切った。

施設は第 1・第 2 ホール、告別室、収骨室、法要室などで構成されている。第 1・第 2 ホールにはそれぞれエントランスホール、受付のほかに遺族控室、僧侶控室、調理室、シャワー室がある。火葬が終わるのを待つ間は待合ロビー (ラウンジ) で待機できる。遺族が少しでも心を休めることができるように、待合ロビーから見える景色には気を配っている。

能登町の住民以外でも両施設を利用できるが、その割合は利用者全体の 5%弱にとどまっており、利用者のほとんどは能登町民である。利用者が最も多いのは旧能都町の宇

²⁾ 能登三郷斎場の概略についての記述は、所長さんからいただいた資料と所長さんへの聞き取りに基づく。

出津地区であるが、これは他地区よりも人口が多いために全体でみた割合も高くなって
いるものと考えられる。上町地区の利用者は全体の約 8%である。



写真 1 第 1 ホール



写真 2 調理室



写真 3 炉前ホール



写真 4 告別室



写真 5 待合ロビー



写真 6 法要室

出所：能登三郷斎場パンフレット（写真 1～6）

能登町全域をカバーしているため、通夜・葬儀時には送迎バスも運行している。自家用車で参列することもできるが、交通手段のない年配の方もいるため、送迎バスは重宝されている。上町地区では通夜より葬儀のほうが送迎バスの利用者が多い。他地区では逆の場合もあり、上町地区では通夜よりも葬儀が重視されていると言えるかもしれない。

A さん（神和住、男性、60 歳代）

能登交通はタクシー会社であるが、10 年程前に葬儀部も営むようになった。それ以

前は、葬儀屋は宇出津に2か所あったが、能登交通葬儀部ができてからはこちらを利用する人が多い。

Bさん（合鹿、男性、60歳代）

かつては自宅葬が主であったが、能登三郷斎場ができてからは9割方そちらで行われるようになった。自宅葬の時は、葬儀後、集落の人たちに酒をふるまっていたが、斎場で行うようになってからは、自家用車で斎場へ行くということもあり、ビール券などが配られるようになった。

3.3 葬儀の流れ³⁾

現在の葬儀も通夜・葬儀、火葬、お骨拾い、納骨・法要の順に行われる。

喪主は故人の配偶者か子供がつとめることが多い。喪主を補佐し、葬儀全般の実務を取り仕切る世話役がいくつかあり、その中心になるのが世話役代表（葬儀委員長）である。故人や遺族の事情に詳しく、信頼のおける人に頼む。故人の血縁者、親族・姻族から選ぶことが多い。

臨終後から納棺まで、遺体は家に安置しておく。その際、頭を北の方角に向けて寝かせる。住宅の事情で北枕にできない場合は、西枕にするか、仏壇に頭を向ける方向にして寝かせる。顔に白い布をかけ、両手首に数珠をかけて胸のあたりで合掌させたうえで布団を掛ける。宗派によっては紋服の上に守り刀（魔除けの意味がある）を置く風習もある。

遺体の枕元には枕飾りを置く。白木の台や小さな机に白い布をかけ、三具足（香炉、燭台、花立て）を置く。香炉には線香をくべて、燭台にはろうそくを立てる。線香とろうそくは昼夜問わず決して絶やしてはいけないため、不断香と呼ばれる。花立てにはシキミを挿す。他に仏壇のリンなども飾る。浄土真宗では枕飯を飾らないのが一般的である。枕飾りが整ったら、僧侶を迎えて枕経をあげてもらう。

通夜は読経、焼香、僧侶による法話、喪主のあいさつ、食事という流れで執り行われる。焼香の順番は喪主・遺族から始まり、その後は前列に着席している参列者から焼香する例が増えている。遺族の中での順番は長男一家、長女一家というように家族単位で行うのが一般的とされている。

葬儀は開式の辞、読経、焼香、弔辞拝受・弔電紹介、喪主のあいさつ、閉式の辞という流れで執り行われる。葬儀を終えると葬儀壇から棺だけが前に出され、故人と対面する。遺族、近親者、故人の友人・知人など、縁の深い順に対面する。その後出棺となる。

火葬炉の前に棺を安置し、本当に最後の別れとなる前に読経と焼香を行う。火葬が終わったらお骨拾いをする。骨を拾い上げ骨壺に入れる。喪主、遺族、近親者の順に遺骨を拾い上げる。石川県では最初に喉仏を拾う慣わしがある。

³⁾ 葬儀の流れについての記述は、主に『石川県の葬儀と法要』（2010：42-45, 52, 59-60, 64-65, 68-70, 72-73, 82, 94-97）に依っている。

石川県では火葬を終えると葬儀会場に戻って遺骨のお勤めをして、初七日法要か中陰法要を執り行うことが多くなっている。中陰とは故人が亡くなった日から四十九日までの期間を指す。これらの法要を葬儀当日に行っても、葬儀の数日後に身内だけで改めて初七日法要を行う場合もある。法要後には会食の場が設けられる。地域によってはこの場を精進落としとして、肉や魚の食事に関するタブーに区切りをつける。会食後は自宅に戻り、後飾り（中陰壇）に遺影と遺骨を飾る。枕飾りは机だったが、後飾りは2～3段である。

遺骨は四十九日の法要とともに納骨式を行って納骨するのが一般的である。お墓が立っていない場合は一周忌か遅くとも三周忌までに納骨した。

法要は初七日法要をはじめとし、七日ごとの法要、百か日、一周忌以降の年回忌法要などの儀式がある。初七日法要以降の四十九日までの法要と百か日の法要は内輪で済ませるのが一般的とされる。四十九日の法要は一周忌までの法要の中で最も重要なものであり、遺族、近親者のみならず友人・知人も招いて行う。一周忌は近親者や友人・知人などを招いて行う。三回忌から七回忌以降は徐々に招く人の範囲を絞り、内輪で行うようになる。宗派にもよるが、三十三回忌か五十回忌で弔い上げとすることがほとんどである。弔い上げにはより多くの近親者を招く例がみられる。その後は先祖代々と併せて法要を行う。法要では読経、焼香が行われる。

3.4 能登三郷斎場・能登町多目的交流センター：事例

通夜の日には班・町内会の2～30人が調理室を利用する。ほとんどは仕出しの食事をするが、ビールを出したり、煮しめやおにぎりを作ったりすることもある。

葬儀の時は主寺と下寺の住職が一緒に経をよむ。火葬の前には告別室で最後のお別れをするが、この時は下寺の住職のみが経をよむ。

上記にもあったが、現在では初七日法要を葬儀と同時にやることが多い。遠くに住む親戚が短い間に2回（通夜・葬儀、初七日法要）のために帰ってこないといけないのは負担が大きくとても大変なことなので、まとめて行うようになった。今では葬儀をした人のうち9割以上が初七日法要も同時に行っているようである。

Cさん（寺分、男性、60歳代）

能登三郷斎場は2つのホールがあるので、2件の葬儀を同日に行うことができる。

通夜と葬儀は第1ホールか第2ホールで行われる。通夜が終わったら仕出しの食事やおにぎりなどを食べる。枕元のろうそくの火を絶やさないために遺族が交代で火を守る。各ホールに裏口があり、そこから出入りできる。翌日に葬儀をする。

下寺の住職に告別室で経をよんでもらい、遺族が焼香し、最後の別れをしてから火葬する。火葬が終わるまで、遺族は待合ロビーで待つ。

収骨室でお骨拾いをして、その後骨をおさめた骨壺を持って法要室へ移動し、初七日

法要を行う。

E さん（天坂、男性、60 歳代）、F さん（天坂、男性、70 歳代）、G さん（天坂、男性、70 歳代）、H さん（天坂、男性、70 歳代）

遺体は家に置いておき、入棺後に通夜と葬儀をする。

神社ごとの地域単位で集まって準備し、誰が香典を持っていくかなどを決めておく。地域によっては大当番・小当番という班内での交代制の当番が準備を手伝う。

4. 考察

ここまで文献と聞き取り調査をもとに、旧柳田村全体と上町地区それぞれの葬儀の変遷について記してきた。町内・近所で助け合う葬儀から専門業者へ依頼する葬儀への変化、ノオクリや服忌中の食のタブーの簡略化がみられた。以前は故人に近かった人か村内の下層階層者が担っていた湯灌や入棺は納棺師が担うようになった。能登三郷斎場ではホールと火葬場が廊下でつながっているため、ノオクリの必要がない。焼香の順番やショウジンアケの日数の男女差はなくなった。その一方で、枕返しや言い伝え、法要については特に大きな変化がみられなかった。トモビキ（友引）の日に葬儀を行うことは現在も避けられているし、初七日、四十九日には近親者のみで法要を行うのが一般的である。

また、葬儀を介した近所の人々との助け合いについても、以前ほどの負担はないものの、現在でも葬儀の準備などを手伝うという点で大きな変化はなかった。こうしたつながりは徐々に薄れてきてはいるものの、完全に消滅してしまうことは今後もなさそうだ。

筆者は、葬儀が変化していく過程において人々の生活の中で何かが変わったのではないか、葬儀が現代化・一般化していく中で地域社会独自のものが失われたのではないかと考えていた。しかし、葬儀の際に近所で助け合うことが完全になくなったとか、信仰心が弱くなったとか、そういったマイナスな変化は聞かなかった。葬儀と法要を同時に行うことや弔い上げを早めることには合理性を追求するという一種の現代らしさを感じたが、少なくとも現時点に関して言えば、葬儀が合理的なものになっても地域社会的な構造（近所の人々とのつながり）にそれほど大きな悪影響を与えてはいない。むしろ葬儀の手伝いの中心を担わなければならない 40～60 歳代の労働者の人々、そして高齢者たちにとっては負担が減っているという点で好影響を与えているとさえ言えるだろう。

5. おわりに

本調査前半では日常生活や生業をはじめとするさまざまなテーマについて聞き取り調査を行いました。普段暮らしている環境と違うこともあり、豊かな自然を利用した生活や近所の人々との助け合いなど、どのテーマも大変興味深くお話を伺うことができました。そして人だけでなく自然も魅力的でした。特に宿舎の外で見た星空が今までで一

番鮮明で美しく、数か月経った今も忘れられません。

本章を執筆するにあたって、能登三郷斎場の職員の皆様をはじめ、多くの方々にお忙しい中でお話を伺わせていただきました。繊細な通過儀礼である葬儀についてお聞きしたことで多少失礼な質問もしてしまったかと思いますが、皆様が温かく丁寧に答えてくださったことに深く感謝しています。本当にありがとうございました。